

第I章 はじめに

1. 地域森林景観とは

(1) 森林景観に対する2つのアプローチ

日常生活の場における森林景観のありようを考えると、「地域」との関係を視野に入れるか否かで2通りのアプローチがある。「地域」との関わりを考慮しない場合には、美しさや傑出性、良し悪しといった総合的な景観評価が中心となるのに対し、「地域」を念頭に置く場合には、地域個性や地域らしさが最も重要な課題となると考えられる。

つまり、“①地域との関わりを考慮しないアプローチ”では、森林を中心とする景観を一つの画像（視覚像）として切り取り、風致施業に代表されるような伐採面の見え隠れ、画像内の諸要素による構図の収まりやパタンの面白さ、色彩の美しさやコントラスト等、画像の形態が有する価値を分析、評価する。したがって、問題とする森林景観が、東北のものであろうと、九州のものであろうとあまり関係はない。画像としての森林景観を対象とし、その評価を左右する普遍的な要因を、構図論、人間の視知覚特性や社会・時代の価値観との関わりなどの中に見出し、汎用性の高い計画・設計論を目指すアプローチと言える。

また、“②地域との関わりを念頭に置くアプローチ”では、地域ならではの森林景観、地域らしさを反映した森林景観が問題にされ、その景観的特徴と地域の営みや文化との関係の解明がテーマとなる。例えば、京都の北山スギは特殊な施業により成立している森林であり、その背景には、京都の長い歴史と文化が培った数多くの建築物や庭園との深い関わりがある。つまり京都という地域の歴史や文化が、この施業形態を、ひいては樹幹の見えに特徴のある森林景観を支えてきたと言える（写真-1.1）。このスギ林を東北や九州へ持っていけばその魅力は半減してしまう。文化的なつながりや人々の生活とのつながりが希薄化するため、地域らしさが失われ、どこか不自然な森林景観となってしまうことであろう。したがって、画像としての普遍的な評価よりも、地域個性あるいは地域景観としての特徴がどこにあるのか、そしてそれが地域における人々と森林との関わりとどのように関係しているのかを明らかにすることに重点が置かれるアプローチと言える。



写真-1.1 京都の歴史、文化と深い関わりのある北山スギの景観

(2) 地域森林景観の重要性

①のアプローチに関しては、これまでも徐々にではあるが検討が進められてきた。京都の嵐山あるいは吉野の千本桜に代表される観賞対象としての森林が分析され、要所にあつて意識を向けられやすい森林などについて、豊かで良好な森林景観のあり方や計画・設計手法についての検討が行われてきた。しかしながら、地域の人々が日常的に目にし、地域における生活の場を構成する要素としての森林景観の役割やあり方に関しては十分に論議されてきているとは言い難い。

何気なく日々目にしている地域の森林や樹木の景観は、地域の居住者、生活者にとってどのような意味があり、どのような役割を果たしているのであろうか。森林は多くの場合、地域の景観の背景となっており、ゲシュタルト心理学で言う「図と地」の関係では、主として「地」を形成している（写真-1.2）。そのため、その存在が意識されることも少なく、



写真-1.2 森林は多くの場合「地」となるが、地域の印象には大きく影響している

役割についても問題にされてこなかったのであろう。

しかしながら、背景である森林景観の表情が異なれば、地域の雰囲気が大きく違ってくることは容易に想像される。つまり森林景観は背景として機能することが多いため人々に意識され難いが、全体の印象には大きく影響し、地域に生活する人々の地域への愛着や帰属意識にも結びついていると考えられる。地域の人々が、毎日の生活の中で繰り返し目にする景観であり、地域住民の心の中に深く刻み込まれていると言えよう。また、地域で生まれ育った人間にとっては、原風景を構成する重要な要素であり、故郷に対する懐かしさや郷愁を喚起させるものであろう。

本研究で主題とした「地域森林景観における地域個性の指標化に関する研究」は②の「地域」との関わりにウェイトを置く考え方に立脚している。今後の地域づくりにおいては、地

域らしさの表出、個性的な地域景観の形成が大命題となる。森林景観に関しても、地域ならではの景観形成を目指し、それを支える地域独自の森林との関わり方を模索していく必要がある。森林の管理や保全を林業のみに依存せず、生活の場としての森林のあり方を追求するためには後者からのアプローチ、つまり「地域森林景観」の考え方が今後ますます重要になってくると考えている。

2. 地域個性の指標化について

(1) 地域個性の指標化の必要性

地域森林景観では、地域の個性、地域らしさが問題にされる。地域らしさを保全する、あるいは地域個性をより明確に印象づける森林管理のあり方の解明が究極の目標である。したがって、その地域森林景観の追求に当たっての課題は、

- ① 地域森林景観の特徴把握のための分析・整理軸を明確にすること、
- ② 地域の営みや歴史と地域森林景観との関わりを明らかにすること、

の2点と言える。

参考資料1)において、〈参考文献1：下村〉は①の分析・整理軸について、取り上げた特徴的な事例を中心に、②の地域との関わりを交えて、その展望を述べている。本報においても、地域の人々の日常的な視線を重視し、中景レベル（ $10^2 \sim 10^3$ m程度）の外景観（森林を外部から眺めた景観）を対象とする。また、本来は地形や森林以外の土地利用との組み合わせも考慮する必要があるが、論点を分かり易くするために、森林のみにスポットを当てて述べることにしたい。現時点で考えている指標化の方法については下記のとおりである。

①要素の多様性

まずあげられるのは、森林景観の主要な構成要素である樹木の種類数についての分析・整理軸であろう。林業地では多くの場合、森林景観の構成要素数は限られている。つまり樹種としてはスギあるいはヒノキが中心であり、その構成要素の種類数は少ない。しかしながら、都市近郊の里山やアクセスの条件の良い森林では、植栽されている樹木の種類も多様になる。東海道新幹線の車窓から眺められる静岡県中部の里山の景観は、種々の果樹をはじめとする多様な樹種からなる森林景観の一例であろう。その他、限られた面積ではあるが、集落や家屋周辺の森林も樹種数は多い。このように、森林景観を構成する要素である樹木の種類数も、地域森林景観の特徴を把握するうえで基本的な分析・整理軸の一つである。



写真-1.3 スギ林とクヌギ等のシイタケ原木林が特徴的パターンを示す諸塚村のモザイク林
②樹種混交のパタン

混交パターンという点で特徴的な森林景観の典型事例が、宮崎県諸塚村のモザイク林である。南面する山腹にクヌギ林とスギ林がパッチ状に交互に分布しており、見事なモザイク林を形成している（写真-1.3）。この森林景観を形成し支えているは、村の主要な産業であるシイタケ栽培と林業である。シイタケ栽培の原木供給を目的として管理されているクヌギ林と、高密度の林道網により支えられているスギ林とが混交し、特徴的なパターンを示している。小規模な私有林が多いことや、緩斜面で路網が発達していることなどの地域の諸条件があいまって形成された地域景観と言えよう。このモザイク林は村の主要な集落や道路から眼にする位置に広がっており、村の人々が毎日の生活の背景として広がっている森林景観である。そしてその存在が知られるようになってからは、展望台も設けられている。

この他、各地で山腹の低い位置にスギの人工林が広がり、その上部に広葉樹林が広がるパターンを眼にすることは多い。また、後述する長野県開田村で見られる、農地、集落、草地と森林との位置関係も、地域個性を表わす特徴的なパターンとして取り上げることができよう。

③面的広がり大きさ

著名な林業地では、スギやヒノキの人工林が大面積にわたって広がっており、林業地を訪れたことを実感させてくれる。こうした面的な広がり大きさも、森林景観の特徴を分析、整理する軸の一つである。著名林業地のように大面積にわたる森林の広がり意識されるためには、単に森林という土地利用の面積が広いというだけでは十分ではない。森林が広く広がっていることと同時に、①の要素の多様性が低いこと、つまり樹種が限られていること、ないしは②の混交パターンが一定であることが必要である。したがって、この面的な広がり大きさは、一定のパターンで広がる均質な森林の面積によって定量的に表わすことができる。

④林縁の明瞭性

ヨーロッパ、特に英国の田園景観では林縁の長さ（境界線の複雑さ）が美観の要素の一つとされる。これは牧草地が森林に接し、その境界（エッジ）が強く意識されるためであろう。しかしながら、わが国の場合、森林は水田や畑などと接し、その境界には水路や小径があったり、地形の傾斜地から平地への変化と林縁とが重なるためか、林縁を森林の境界線として

強く意識することは少ないように思う。しかも、昭和に入ってから、草地在著しく減少している（この70年間に原野(草地)面積は1／8に減少している）こともその傾向を助長しているのではないか。

長野県開田村は、農耕馬である木曾馬と長く共存してきたことが背景となって、森林と農地や集落との間に、放牧地、採草地としての草地在広がっている。草地在森林と接しているため、アルプス的な田園景観を有する場所として、写真家には知られた村である。写真に見るとおり、森林の境界が意識され、その明瞭さが開田村の森林景観の特徴の一つであると言えよう。このように森林が草地在接する場合には、森林境界が地形変化を伴わず、敷地の連続性が意識されるため林縁が明瞭に認識されると考えられる。また、埼玉県三芳町の三富新田も、平地に展開する森林で地形に変化が無いことに加え、林床の管理が優れているため立地の連続性が意識され森林の有無が境界を形成している。このように、森林が草地在接するなど地形が連続していることや、林床が十分に管理されていることによってもたらされる林縁の明瞭性も、各地域の森林景観の特徴を整理・分析する軸の一つと言える。

⑤樹幹の見え方

また、冒頭で述べた京都の北山スギに特徴的に見られる樹幹の見え方も地域森林景観を特徴づける要素の一つであろう。改めて記述するまでもなく、京都の建築や庭園などの文化を支えてきた北山ならではの特徴的な施業体系が、樹幹の見え方に特徴のある森林景観として現れたものであり、地域森林景観の最も典型的な事例と言える。また、岐阜県の今須林業地においても、従来からの集約的な施業形態が生み出した森林景観では、樹幹が見える点に特徴を有している。樹幹の見え方の北山との比較に関しては今後の課題であるが、そのパターンには差異があるのでないかと考えている。このような樹幹の見え方のパターンや、樹幹と樹冠の見えの割合などの指標によって、各地域の森林景観の特徴を定性的、定量的に把握することができると考えている。

⑥テクスチャ

テクスチャとは肌理（きめ）のことで、ものの表面状態を視覚的あるいは触覚的に表わす概念である。景観に対して表情を与え、対象に対する親しみや味わいなど極めて情緒的な効果を含んでいることが指摘されている。森林の外景観にとって、個々の樹冠の連なりが生み出すテクスチャは、景観の特性を規定し印象を左右する非常に重要な要素である。

ここでは事例として吉野と日田を取り上げてみたい。写真（写真-1.4、1.5）に示すように、両地域の典型的と考えられる森林景観を取り上げて比較すると、その表情には差異があるように思われる。日田の場合には、そのテクスチャを構成する要素である樹冠の形が揃っており、その配列も規則的で、全体的には整然とした印象を受ける。一方、吉野の場合には、日田に比べて樹冠の形状や配列が揃っておらず、バラバラではあるものの柔らかい味のある印象を抱かせる。この差異に関してはまだまだ仮説の段階であり、結論づけるまでには定量的な比較や、典型性、代表性に関する調査など、詳細な検討が必要である。



写真-1.4 柔らかいテクスチャを示す吉野の森林景観



写真-1.5 整然とした景観を示す日田のスギ人工林

しかしながら、両地域の林業が目指す方向や、それを支える施業形態の差異を考えると、その表現形である森林景観の上記の差異には納得がゆく。

日田が効率の良い用材生産を目指し、形質の良いスギを挿木で植林し、比較的粗植で単伐期施業するのに対し、吉野は完満無節で通直な大径材生産を目指し、実生苗から高密植栽し、利用間伐を繰り返して長伐期に施業する。また、日田では8割以上をスギが占めるのに対し、吉野は適地適作でスギとヒノキを植栽している。こうした両地域の施業形態が先述した各々の森林景観の特徴を支えていると考えられる。

(2) 地域個性の指標化のための方法

以上の様に、地域森林景観の特徴把握のための分析・整理軸はいくつか考えられる。本報では、特に地域森林景観の特徴把握のための分析・整理軸を明確にすることに主眼をおいた。地域森林景観における地域個性の指標化を試みるにあたり、まず、実際に我々がどのように森林景観を識別しているのかについて調べた。また、知識の有無が認識の違いとなって現れることも考えられたため、被験者を一般の人と専門的な知識を持つ人に分け、比較、分析をおこない森林景観における形態的特性、および色彩特性といった森林の外景観から得られる情報を視覚的物理特性として捉え、何が森林景観を特徴づけ、識別の要因となっているのか、またそれがどのような階層構造を形成しているのかについて把握することとした(第II章)。

次に、第II章の分析の結果より、特に重要であると思われた項目について着目し、地域独自の施業方法や各域の生活者との関わりの中で創出されたと考えられる、地域森林景観の特徴についての定量化を試みることにした。具体的には、景観対象となった森林景観の樹冠のテクスチャに着目し、実験的に樹冠のテクスチャの定量化をおこなった。テクスチャの規則性の分析に関しては濃度ヒストグラム法(GLHM)を、テクスチャを構成する樹冠の輪郭線の複雑さの分析に関してはフラクタル次元の概念を用いてボックスカウンティング法を用いて検討を進めることとした(第III章)。